第１３７回　国語教壇修養会にご参加くださりありがとうございました。
ご意見や質問などにお応えしながら所感を述べ、感想を寄せられた方々への謝意とさせていただきます。ミス等がありましたら事務局の手違いです。ご容赦ください。

７月２２日　（第１日目／３日間）

１年生

○　１人ひとりのノートをチェックして、個別指導し、指示を徹底させているところがすばらしいと思いました。
○　初め言葉の終わりを指示棒で指して、黙って、目で読ませてから、次に声を出して読ませていました。腰骨を伸ばして読ませていました。
○　１年生でも集中して、一生懸命に授業に取り組んでいました。

６年生

○　粗筋を子供たちに確認しながら、さらっとつかませたそのテンポが、子供たちに飽きないで学習に取り組ませる出だしになっていたと思いました。大事な言葉を短い言葉で太一の会話文から選ばせていました。この作業をすることによって、子供たちは話の内容を読み取ることが大分できるようになったと思いました。教科書を使わないでも、話の内容がほぼ子供たちから出てきたのはすごいと思いました。　（若）

感想をお寄せくださりありがとうございます。会長としての所感を書いてみます。

・　小学校では、集中力を育てることが大事だと考えています。先生の話を正しく聞いて行動できるようにすることです。入門期の指導は、聞く力を育てることが要です。２か月もすると、先生の話を聞いて正しく行動できるようになってきますが、油断せずに日々積み重ねていくことが大事です。特に、授業に入るところで意識を授業に向かわせる活動が必須です。(いずみ会HPの入門期の指導をご覧ください)
・　視写した板書を読ませる活動〈五よむ〉には、いくつかの意義があります。その１つは、今日の学習を進める準備としての読み（音読）です。音読が、どの子にも理解の助けになるからです。２つ目は、学級の代表として音読する〈一よむ〉の訓練です。指黙読では、文字でなく言葉のまとまりとしてつかむ活動を指示棒の動きで養います。指音読では、みんなで声に出すことがその力を補強していきます。声の小さい子、口がうまく回らない子も、みんなで一緒に音読することで声の出し方を学びます。３つ目は、１つ目と重なる部分もありますが、〈四かく〉で高まった集中力を指黙読でためを作り、指音読で発散させて気分の転換をはかります。それで、心新に〈六とく〉の探究に進むことができるのです。４つ目は、学級の集中力を高め、声も揃ってくることです。腰を伸ばすことと句読点で指揮棒を押さえカチッと音をさせることが、そのための具体的な技術です。５つ目は、〈五よむ〉の前に机上を整理させます。板書に注力させ、〈六とく〉をより深い理会（辞書で確認を）へ導くためです。今の精一杯を出すことが、生きる力を養うことにつながるというのが、芦田恵之助先生の教育観であり人生観です。それが〈五よむ〉に一番端的に現れています。

７月２３日　（第２日目／３日間）

○　本日は素敵な授業を見させていただき、本当にありがとうございました。
　特に４年生「ふしぎ」の授業は、とても児童の食いつきがよく、興味関心を引き出し、理解を深めていたなと感じました。自分も参考にさせていただきたいと思いました。
　１つだけ質問なのですが、ノートに文を写したあと、板書を用いて授業を進めていましたが、板書に付け足した言葉の意味や大事なポイントは書かずに授業を終わらせていました。その付け足しは子どもたちのノートには書かないのでしょうか。教えていただけるとうれしいです。　（永）

感想・質問をありがとうございます。授業者に返事をお願いしそこないましたので、会長が書いてみます。

４年生は立派でした。詩「ふしぎ」の面白さを味わったり、想像をふくらませたりしていました。
さて、ご質問の「黒板に追加された言葉や印を授業時間内にノートに書き加えることをしなかったのは、なぜか？」について考えてみます。
まず、時間が確保できないということです。
しかし、昨年大阪で開催した第１３６回の私立城星学園小学校の会では、城星学園の担任が２名授業され、最後に５分間、ノート整理の時間を確保していました。授業感想も書いていました。城星学園では、国語の読みの指導は芦田教式で全学年実施していますが、授業の工夫としてあってもよいと思います。
次に、なぜいずみ会ではノート整理の時間を確保してこなかったかを考えてみます。
①　〈４かく〉で書き出した語句や文章は、その教材を理解する助けになるものです。その中で特に重要なところに印をつけています。それは、考える道順をはっきりさせたり、大事な語句を発見したりするためのものです。
②　考えることが大事で、その結果を覚えることを目的にしていないからです。別な言い方をすると、「ここがテストに出る大事なことだからね」ということではないのです。それより、時間があったら板書を暗唱させましょうと考えています。それは、深い理会から生まれる余韻を楽しむことにつながるからです。また、内から生まれるものを大事にしたいからです。自覚を促す働き掛けをしているのです。
③　授業を、大事なことを覚える時間だという考え方は、取りません。知識注入型の授業を目指していないのです。読んだり作文したりすることの楽しさを味わわせて自ら読んでみよう、書いてみようという意欲を育てることを目指しているからです。芦田恵之助先生は、「読むことは自己を読むこと」「綴ることは自己を綴ること」だと書き残しておられます。
④　担任ならノートを集めて子どもの書きぶりを確認したり、添削したりします。それは、学級全体の傾向や子ども一人ひとりの実態を知るためです。作文指導でも同じですが、あまり注文を付けません。変なところには印をつけて考えさせます。自宅学習で授業を思い出してノートを整理した子には、労いの言葉を添えることもあります。
　私はこのように考えていますが、いずみ会全体の考え方ではありません。みんな

で考えたい今後の課題の１つです。役立ったでしょうか。ありがとうございました。

参加１日目です。（２４日にも参加してくださいました）

〈１校時〉
・文章に忠実に指導する。
・実態に合わせて、ゆとりをもってゆっくり指導する。
・ねらいを確実に伝え、児童に終着点を理解させる。
・活動の（読む・書く）めあてを与える。
→書くの後の机間指導（一人ひとりのノート…）
・句読点を意識させる。（一斉読みの時）

〈２校時〉
・机上整理
・取り組やすく鉛筆をはさむ。
・ていねいな文字での板書
・机間指導（一人ひとりのノート…）

〈３校時〉
・高学年らしく読ませる範囲が広い。（充実感があるように…）
・教科書を読みたがらない子に変わるのは指導者！！
・ノート、板書

〈４校時〉
・指導者のほがらかな笑顔が子どもたちを集中させている。
・前時の復習を短い時間で行っていた。

大変勉強になりました。ありがとうございます。

＊　どの先生も板書の時間（教科書の文章をノートに書き写す作業）を十分にとっていたが、その意図を教えていただきたいです。例えば、家で書いてくる。そして、子どもたちへの問いかけの時間をもっと長くする……ではどうなのですか。

保護者面談が午後からあるので、授業参観だけで失礼します。（冷房が少し寒かったです。あしたも来るので……）　（菊）

お忙しい中、授業で心にとめられたことを４時間分メモしてくださり、ありがとうございます。授業者にお願いしそこないましたので、会長が返事します。

＊〈四かく〉についてのご質問ですが、授業をご覧いただいて気付かれたと思いますが、どこを書くかについて、授業者が授業の流れに沿って指示していました。これを「手引き」と言っております。この手引きに従って、書く意味を子どもたちが理解した上で視写をすることが大切です。ですから、機械的に書き写すのではなく、手引きに基づいて、信念を持ち、頭を働かせて書くことをねらっているのが、〈四かく〉です。そうして書いた言葉や文章を、次の〈五よむ〉で確認し、〈六とく〉で深めることになります。ですから、家で書くこととは意味が違うと考えます。

さらに、視写の意義を申し上げるとするならば、最もゆっくりていねいに読む活動が視写です。この活動は、読んだ部分を覚えて書き写すので短期記憶能力を鍛え

ます。今の言葉でいえば『メモリー容量』を増やすことになります。

力の弱い子でも時間保障してあげると視写できるようになります。毎回１０分程度の時間を当てます。短い時間ですが、繰り返すことで書写力も育ちます。時間内に書けなくても責めないことです。精一杯の力を出したことを認めます。根気強い子になります。教室には鉛筆の音しかしない静寂な時が流れます。これが安心できる学級の雰囲気づくりに役立ちます。教師も板書することが大事です。師弟共流・師弟同行などといいますが、力の弱い子にも後ろ姿を見せて共に頑張ろうという自覚を促します。子どもの書く時間を保障することにもつながります。

新出漢字なども見て書かせます。筆順はとか、問われますが、子どもに挑戦させることを求めます。教えられないことはできない、やらない、やってはいけない、と考えません。今もっている力で挑戦させます。ですから、書き間違えなども想定しています。その場合は、消しゴムで消さないで、線を引く、見え消しをさせます。こだわりの強い子には、消しゴムの使用を認めますが、間違いも自分の足跡を残す貴重な資料です。振り返ってノートを見ると、自分の成長の跡が分かります。間違えることは悪ではないのです。気付いたところで訂正をすればよいだけの話です。完璧を求め過ぎないのが小学校教育では大事です。好奇心を育てるためにも、挑戦的な態度を育てるのにも役立つ消しゴムは使わないという些細なことの中に大事な教育的意義を認めているのです。

話し合いの時間を確保するために家で書いてくるという考え方もあるでしょう。今、アメリカの大学で効果があり、盛んに言われている反転学習という指導法ですね。でも、今の公立小学校では、家庭環境等を考えると差別につながりそうですね。どの子にも力をつけるためにはチャンスを与えなければ育てられません。何時も、その場での真剣勝負を求めます。精一杯やってみようということです。そのための工夫が教式にはたくさんあります。探してみてください。

（１校時）　経過時間毎に書いてくださったので、時刻は省略して順次書きます。

◎　読む時、聞く時の教科書の正しい持ち方を、初めに指示する大切さ。
◎　「大きな声で、ゆっくり読むように。」代表児童６名、全員ができたことを労う。聞いていた１３名に「何が書かれているか、よく分かったでしょう。」と、確認。
◎　「発表する時は、手を挙げて。」
◎　「見つけたら、指でさしてごらん。」
◎　ノートに視写する範囲の吟味。
△　視写する速さの個人差。（マス目いっぱいの大きさで。）
◎　終了１０分前に、机上の物をしまわせる。
◎　板書文、まず黙読。次に、音読。指示棒で、揃える。
◎　「この中に、難しい言葉は、ありますか？」
△　「あてる」時は、「呼名」したいもの。大きな名札が欲しくありませんでしたか？
△　前から２列目、Ｙ.Ｈ先生から見て、右から２人目の男児、退屈そうでした。姿勢の崩れがひどい。
△　１０分オーバーで終了。これはいけません。

△　「学び合い」は、取り入れないのですか？（４時間全部に問う）

◎　「黒」板に、マス目が入っていて書きやすいし、見やすいので、うらやましいです。

〈授業者の返信〉これは、会期中に授業者に渡して宿で書いてもらったものです。

・　手を挙げさせて指名後答えさせるやり方は、発言を保障する方法です。手を挙げずに口々に発言させ、それを教師が拾っていくというやり方は、声の出せる子どもの発言は保障するが、声を出しづらい子どもには、発言しにくい環境を作ることになり、教室内に上下の差を認めることになります。言ったもん勝ちという学級を作ることになります。ということで、手を挙げさせ、指名されたものに発言させるという方法を採用しています。

・　「大きな声でゆっくり」は、誰でもできることとは言い切れないが、「〇〇の気持ちになって」「その気持ちが表れるように読みましょう」というより易しいのではないでしょうか。ゆっくり読むことは、たどたどしい読みを認めることにはなりません。しかし、だとたどしい読みであっても、時間をかけることで、聞いているものがいろいろ考えることができるので、ありがたいことになります。それで、大きな声でゆっくり読んでくださいと言っています。また、賢い子どもの中には、早口でつるっと読む子どもがいます。文字面をつるっと流すような読み方で文字を音に置き換えただけの読みをする子どももいます。本当に分かっているのだろうか、と疑問もわきますし、読みの力の弱い子どもにとっては分かりにくい読みとなります。つるっと読む子どもを認めることは、学級の中にできる子とできない子を認めることであり、学級の中に上下の差別を持ち込むことになります。

△　前から２列目右から２番目の児童は、本人が何らかの課題をかかえている児童であると見ました。通常学級でできることは、この子どもの課題に応えた指導を行うことが大切だと思います。変化に弱いという課題をもっていると思いますので、なるべく毎時間同じような指導を続けること、自尊感情を少しでも高めることができるよう（なるべく否定表現を使わず）肯定的に評価をくわえることを続けたいと思います。そんな中で自尊感情が高まり、それが学習意欲の高まりにつながり……とよい方向へのスパイラルがつながるものと期待しています。

△　あてる時に、名前を呼んでやることについて、名札があり、それをもとに子どもを「あなた」ではなく「〇〇さん」と呼んでやることは大事だと思います。ただ、そのためには担任の先生に余計な労力をおかけするのではないか、飛び入りで参加した先生であるので、子どもの名前を知らないのは当たり前で、しかも「あなた」ですみますので、わざわざ労をかけていただかなくてもよいとは思います。

△　学び合いは、指導が大変だと思います。特に力の弱いお子さんが学び合い学習でより劣等意識を持たないかと…。

△　１９６６年と１９９６年を勘違いしました。（欄外の計算式についての返事）

＊「学び合い」について、会長の考え方を書きます。

　いずみ会として「学び合い」について話し合ったことはありません。私は「学び合いの授業」を参観したことはありません。また、内容はネットで見た程度です。

ですから、ほとんど分からないと、いってよいです。
「学び合い」は、児童相互が教え教えられる状況の中で主体的な学びが保障できるということでしょう。「共に育つ」ことを目指すのは、芦田教式の教育観と重なります。具体的な手法の違いはあるでしょうが、底を流れる思いは同じだと思います。教師側がその技法をしっかりと学びながら実践することが必要だとも思います。教師がどれだけ児童に委ねられるか、そこが大きな問題ではないでしょうか。

（２校時）児童１３名

◎　「後ろまで聞こえる大きな声で、ゆっくりと読んで御覧なさい。」
◎　「ふしぎに、思った事は、何ですか？」
◎　「作者が、不思議に思った事は？」
△　積極的に挙手して発表するのは、３～４名。
◎　対比できる言葉に着目させる発問で、積極的に挙手・発表する子が、３名増えた。分かりやすい発問にすることが大切。
◎　ノートに視写。机上の物を置く位置を、ほめていた。
◎　しまわせ方にも工夫が見られた。
◎　板書黙読、一行を全員で音読、速さをほめる。
　声量を励ます。句読点で口を閉じさせる。
◎　「この連では、何を、ふしぎと思ったの？」という焦点化した発問で、まだ、挙手していない子どもも発表するようになった。
◎　たくさんの人に聞いたことが分かる㋭に着目させた。
・　出だしの「わ」に、力を込めて音読。
・　部分暗唱。（◎　これは、**面白い**です。）

〈授業者の返信〉

感想ありがとうございます。
・　教式に沿って授業を組み立てました。
・　教材の内容と子どもたちの生活を結びつけることで理解が深まる（いずみかいでは理会と言います）と考えています。
・　みんなが不思議に思うこと、どうだったら不思議じゃない（あたりまえ）？などです。
・　文法の扱い「連」という言葉の扱い等も押さえます。できるだけたくさんの子どもたちが発言できるように子どもたちの様子を見ながら問いの言葉を変えました。
・　本当は、全暗唱までいきたかったのですが、時間がなくてできませんでした。あの子たちならできそうだったので残念です。私の時間配分のミスです。

＊学び合いについて

私は、教式は学び合いに適していると考えています。教師と子どものやり取りのように見えるかもしれませんが、お互い（子どもどうし）の言葉を聞くことでイメージ（教材の場面）が広がっていくと感じています。それは学び合いそのものだと考えます。

（３校時）児童１５名

△　同じ指示「ノートに鉛筆を、はさんで、閉じなさい。」は、いらない。「ノートは閉じるんだよ。」と、思います。(「くどい」と、思われる恐れが、あります。)
◎　音読する児童を、指名した点。？１人目の子が、拒絶。
△　その都度、一人ひとりに、「個別評定」を、簡明に行うと、「いい労い」と「励まし」に、つながると思います。
◎　「古文の１つ目は、何？」や「それは、何年前のもの？」という発問が、分かりやすい。
◎　「物語って、何？」、「竹取って、何？」など、発問が、細分化されており、簡明であった。
◎　ノートに視写。
◎　K.M明先生は、何も見ずに板書。(素晴らしい！)
△　机上の物への指示、１回で充分だと思います。
◎　「難しいことは、ありませんか？」「いと、って、どういう意味？」等の発問も good で、子どもに親切です。
◎　全員で、音読。「もう１回、３倍くらいの大きな声で。」音読。終了。これは、見事です。
△　ノートへは、書き込ませないのですか？

㋐ この子へのフォローー、何が、いいですかねぇ？

〈授業者の返信〉

△　「鉛筆をはさむ」というところに意図があります。ころころと落ちないようにするためです。
△　場合によって、そうすることもあります。基本は、読む者は一生懸命読み、聞く者も一生懸命聞くということだと思います。
△　指示は、簡明にすればよいと思います。気をつけたいと思います。
△　授業では、手引きに従いノートに書く（視写）ことを通して、「手で読む」ところに意義があります。家でノートを開いて見直したり、自分の考えたことを書き入れたりすることができるようになればよいと思います。
㋐　この子は、読む練習をして、今日こそは読もうと努力してきたのでした。順繰り読みで、次に順番がまわって来たときに読めるかもしれません。読めない時は、また教師が代わって読んでやります。この積み重ねで必ず自ら読めるようになってきます。(**＊追記**、２４日、順番がきたら読んでくれました。嬉しいですね。)

（４校時）　児童１９名

・　指名された児童が音読。
・　前時の要点の、振り返り。
△　本時の「めあて」を、板書しないのは、なぜですか？
◎　文の流れを、絵で描き、１問１答式で、進めていのは、分かりやすかった。
・　ノートに視写。

◎　K先生は、何も見ずに板書。
　　（すごいです。私、こんな長文、「自信」ないです。）
・　女児が、板書を見ながら音読。
◎　「瀬の主、って何？」「おだやか、ってどういうの？」「一人前、ってどういう意味？」等、１問１答式は、簡明で、good 。まさに、「行間を読む」授業でした。
◎　「どこで分ける？」「ここでの、太一は、どんな表情？」
◎　感情移入のさせ方が、絶妙でした。
△　ノートに「書き加え」させないのは、なぜですか？

〈授業者の返信〉

授業を参観いただき、時間を追っての感想、ありがとうございました。

・　私達は、芦田恵之助先生の実践を通して考えられた「教式（教授方式）」に沿った授業を通して、「どの子にも分かる」ことを目指しています。
〈理解の早い子だけでなく、発言する子だけでなく〉
・　どの子にも分かる手立てとして全員が順繰りに読む音読を大切にしています。
〈毎時間〉
・　「めあて」や「課題」は大人でも難しいことですから、力の弱い子でも授業を重ねることが大切だと思います。
・　理解させたい大切なところですから、重要語句や文章は暗唱し、教師が一生懸命書く姿で子供にも集中力をつけたいと思います。
・　授業に集中して考えさせるため、余計なものは机の中にしまいます。
・　重要語句は単なる難解な言葉ではなく、文章の中で意味あるものにするために簡単と思われる言葉でも確認させます。
・　大切なところを理解させるため、区分し、とっておきの一語を見つけやすくします。
・　ノートに書くことも必要ですが、大事なことは考えること、自分の精一杯の力で学ぶこと、心に残る言葉を理解させ、文章の面白さに気付かせることが国語の授業では大切だと思います。
・　「学び合い」「発表し合う」子にするために、「よく考える」「よく理会する」「相手の話をしっかり聞く」子を育てることが国語の主たるものと考えます。その力を生かし、他の教科や全教育課活動の中で「学び合い」「話し合い」のできる子が育つと考えます。

＊　芦田教式では「共育」という、子供も教師も共に育つ学びを目指しています。自ら考える子を育てるためには、教師自身が借り物ではない自ら考える教師でありたいと思います。言葉では簡単に言えますが、このことが最も難しく、現職を退いてからも学び続けています。すぐできる簡単な便利さを求められる時代ですが、初等教育では、いつの時代も変わらないものもあるのではと思います。子を育てているようで育てられているのが親であり、教師ではないかと思います。まとまらない返信となりました。お許しください。

午後の「講座」から

（１）Ｔ.Ｋ先生は、「板書を指音読させる際、『ムチ』を句読点で、打つと、リズミカルになる。」と、おっしゃったことは、とても良い支援だと、おもいました。

（２）　ただ、『ムチ』という名称に納得できません。『指』示棒、ではないでしょうか？

『無知』なのに、生意気なことを、申し上げました。お許しください。（飯）

講座への質問をありがとうございます。

いずみ会は、大正時代から活躍されて芦田恵之助先生の正風を後世に伝えようと鈴木佑治先生が昭和２３年（１９４８年）に始められた国語教壇修養会です。教壇修養会は、公開授業を通して教材の読み方や読みとったことを授業としてどのように展開するのがよいのかを実践的に学ぶ会です。それで、公開授業を大切にしているのです。

唱歌「雀の学校の先生は…」に出てくる鞭をふりふりの「鞭」を、鞭打の刑や牛馬に鞭打って労働を強制するとかという負の意味はなく使っています。しかし、ご指摘のように指揮棒・指示棒・タクトなど別な言葉を使うことも検討すべきときかもしれません。ありがとうございます。

７月２４日　（第３日目／３日間）

○　本日はありがとうございました。２日間、授業を参観して教材分析が深くなされており、一つ一つの言葉を大切にして読み込んでいき、必ず教科書の言葉に戻らせて考えていくのがすばらしく感じました。教師側がそれだけ読み、関連付けたり、発問を考えたり、問い返しをしたりする力をもっと伸ばしていくべきだと感じました。学校の都合上、残念ながら午後の参加はできないので、以下に質問を書かせていただきました。

・　物語でも作文でも、視写(or 聴写)している時間には、子どものノートを見ていませんでした。机間指導をしないのはなぜですか。(分からなかったり、まちがえている子がいたりしたら……)

・　竹―、おー、きーなど、言葉を省略して板書するのは、時間の短縮ですか。芦田教式は、初めてなので教えていただけると幸いです。　（近）

感想・質問をありがとうございます。会長が返事します。

・　さて、ご質問の「視写の時間に机間指導をしないのは、なぜか？」について考えてみます。

板書を終えてから子どもたちのノートを見て回り、何人かの子に囁くように話しかけていましたが、子どもたちがノートを書いている隣で指導はしていません。それは、子どもが今の精一杯を出せばよいと考えているからです。

視写の目標は、大きな字で書くこと、鉛筆の色を出すことの２つです。書き終ったらノートを見なおすように指示は出しませんが、授業者は板書後に見直しをしています。すると、子どもの中には、それを真似る子が出てきます。その時に、そのことに触れ、自覚的に見直しをするように導きます。

新出漢字などが出た場合は、指導しないのか、という疑問が沸いてきますが、基本的には、第三次指導で行います。家での予習や復習を強制しませんが、自分から自宅学習をするような手立ては講じます。それは、教科書の仕組みを見させるところから始まります。脚注や単元末に示されていることの意味、巻末の付録の部分の働きについて考えさせます。教科書は、自学自習できるようになっていると知らせ、好奇心を刺激しておきます。教師は、子どもが教材文を読んでおくと国語の授業がもっと楽しくなるような工夫をします。そのために、国語教壇修養会はあるのです。

・　次は、「竹―、おー、きーなど、言葉を省略して板書するのは、時間の短縮ですか？」について書いてみます。

あの時間の板書で、「竹―」は、「竹取物語」の省略ですが、そのまま「竹」の絵のような取り扱いにつながり、竹の根元に光が見えたという前時のおさらいになっていました。「竹取物語」と書くと固定化されますが、「竹ー」と短く書くことで活用できる利点があります。

もちろん、ご指摘の通り時間短縮の意味もあります。他に３つほどのことも考慮しています。１つは、思い出せる手がかりになることを残し、短期記憶力を鍛えることです。２つ目は、学習メモの作り方を体験させることです。３つ目は、テンポよい授業のリズムを作ることです。他のことにも通じますが、教式での一つひとつの活動には、複数のねらいが潜んでいます。３年間は教式通りに授業しなさいと、先達が教えてくれた意味がこんなところにあるのだなと、今の私には理解できます。もっと早くに気付いていればよかったのにと思っています。

○　２２日、２４日と２日間、国語教壇修養会の授業を参観させていただきました。授業者の先生方の思いに触れることができ、たくさんのことを学ばせていただきました。

特に、板書の丁寧さ、美しさは、改めて普段の授業から見直していかなければと思い出させていただきました。子ども達に美しい字をと声掛けるのであれば、板書の字で学ぶことを意識した授業をしなければなりません。子ども達のできないことを指摘するのではなく、できることをほめていかなければならないと思いました。

また、音読は、読み取りの要であり、一人で読めること、全体でそろえて読むこともさらに心掛けていきたいと思いました。はじめの読みとまとめの読みでは、読みとったことを音読に生かしており、大変感動しました。ありがとうございます。　（畑）

感想をありがとうございます。感想に触発されて浮かんできたことを書きます。

２日間も参観してくださりありがとうございました。授業者の思いを汲み取ってくださり、ご自身の実践と重ねて考えている様子が伝わります。１日目と３日目では、子どもたちの姿が変化していることも感じてくださったようですね。小学校教師の感性が豊かな方だなと、ご縁が生まれたことを嬉しく思います。

子どもたちは、先生の言うことよりすることを真似ると言われます。生涯学習の時代です。その基礎を養うのが小学校教育です。どの子にも義務教育を終える時には、教科書を正しく読めるように育てたいと思います。芦田恵之助先生は、皆読・皆書・皆綴・皆話を目指して実践を重ねられました。その中から生まれたのが、読

み方（七変化の教式）指導であり、綴方（作文）指導です。どの子（皆）にも力をつける方法は、順繰り読みと漢字の全部書き（段落にある漢字を全て書き出す）だと、芦田先生は書き残されています。

芦田教式には〈一よむ〉〈三よむ〉〈五よむ〉〈七よむ〉と読む活動が多い指導法です。また、話し合い（問答：二とく、六とく）の前には音読が入っています。音読することで内容が分かりやすくなるのです。人類史を繙くと、文字を使い始めたのはほんの少し前からだと分かります。日本でも、識字率が今のように高くなったのは、高々百年足らずといってよいでしょう。ですから、話し言葉での生活には長い歴史があるのです。脳の仕組みもそれに対応しています。音読の意義がここからも分かると思います。

どの子にも音読できる力をつけることは、生涯学習のはじめの一歩にあたる基礎中の基礎になります。上手に読めなくても、その経験を積ませなくては育ちません。しかも、機械的に割り振るから自然と自分の役割を自覚するようになるのです。それが所属意識を育てて心の安定を図ることにもつながるのです。この学級の一員だという感じられる１コマが〈一よむ〉の順繰り読みにはあるのです。そのためには、聞く方の子どもたちの聞く力（態度）を育てることが必要です。黙って静かに聞くことを求めます。聞くことに意識を集中させる方法として、本を両手で持つことと、腰を立てることを訓練し、順番の子が教科書を読む声を聞きます。同時に自分自身も黙読します。このことは、自制心を育てることにも結び付きます。読み手のミスにすぐに反応し、口を出すようなことを制御できるようになります。「読み間違いを正すのは教師の仕事です」とその役割を明示しておくと、読む人にとってはプレッシャーが減り、聞く方はじっくり読み手の声を聞きながら中身を考える機会にもなります。

２３日に続いて２日目です。（菊）

〈１校時〉

◎　授業の流れ、詩の教材解釈など勉強になりました。

・本文をノートに書かせたあと、その文章はどのように生かすのか？
（机の中にしまったあと……どうなるのか……）

・〈一よむ〉の読ませ方の意図を教えてください。（１～４連と全部の５名）

・速読してまとめていたが、感情を込めなくてもいいのでしょうか？

〈２校時〉

◎　作文を通して、マイナスをプラスに評価してあげることが勉強になりました。

・き　ま　い　　くんが泣いていたのは、もしかしたら読んで欲しくなかったのでは……。そういう場合も考えると読まないこともありではないでしょうか？

・　井　の　さん本人の前で、視写したり、細部まで取り上げて解釈するのに少し違和感を覚えました。本人の気もちを確認しなくてもよかったのでしょうか？

〈３校時〉

◎　古文の学習のすすめ方など学ぶことができました。

◎　古文が書かれた頃のことを想像させることの大切さ、改めて、板書の美しさなど勉強になりました。
・ノートに教科書をはさむ…具体的にどういう意味があるのでしょうか、教えていただきたいです。
・盛者必衰のイントネーションを正さなくてよいのでしょうか？

〈４校時〉

◎　前時のおさらいを絵で確かめるのも１つの手だと思った。
（とてもわかりやすい）
・難しい場合は、先生の解釈を教え込んでもよいのかを教えて下さい。

かつて、K.M先生には指導主事訪問で御指導いただいたことをよく覚えております。ありがとうございました。

いろいろ疑問を書きました。勉強になったから生れた疑問です。お忙しいとは思いますが、教えていただければ幸いです。

２日間に渡り授業を参観してくださり、感想や質問を出していただきました。ありがたいことです。授業者に代わり会長が感想等への所感を書きます。

各時間の大事なところを観察して書いてくださりありがとうございます。質問を中心に考えたことを書いてみます。

・「本文をノートに書かせたあと、その文章はどのように生かすのか？」ですが、特に何もしません。同じような質問がありましたのでそちらをご覧ください。
・「〈一よむ〉の読ませ方の意図を教えてください。」ですが、各連の意識付けを意図して連毎に読み手を変えました。〈二とく〉に入るために、全文を１名に読んでもらいました。詩の場合には、短いので〈一よむ〉で２、３回読むことが多いです。
・「速読してまとめていたが、感情を込めなくてもいいのでしょうか？」についても、授業者の話が別な個所にありますので読んでみてください。「感情を込めて」という点については、詩の学習で「音読・朗読」に焦点化した指導法があることは聞いたことがありますが、いずみ会では特に意識させません。暗唱を目指します。
・「きじまたいしんくんが泣いていたのは、もしかしたら読んで欲しくなかったのでは……。そういう場合も考えると読まないこともありではないでしょうか？」については、読まないということもあります。担任なら状況が分かるのでそういうことも考えて人選します。でも、彼の笑顔が、最後には見られましたね。
・「石井そのかさん本人の前で、視写したり、細部まで取り上げて解釈するのに少し違和感を覚えました。本人の気もちを確認しなくてもよかったのでしょうか？」については、本人に了承を得ることが大事ですが、結果としてはよかったのではないのでしょうか。３段落目が石井さんの一番書きたいことだと焦点化してあげればもっとすっきりしたようにも思いますが。彼女は、お兄さんのことを書くと決めたら否定的な兄の姿が浮かんで来ました。しかし、書いていくうちにお兄さんの大切さに気付いたのでしょう。自分でも気づかなかった本心が出てきたのです。そう考えると、第４段落の結びが生きてきます。私は、そのように読みました。学級の子どもたちは、そのお兄さんのことをよく知っていますから石井さんの心情もよく分かったのではないでしょうか。作文を書くということの意義がよく出た作品です。
・「ノートに教科書をはさむ…具体的にどういう意味があるのでしょうか、教えて

いただきたいです。」については、念のため録音で確かめたところ、「ノートに鉛筆をはさんで。その上に教科書を載せて」と指示していました。ご指摘のとおり、「ノートに教科書をはさむ」ように指示したのだとすれば、意図不明だと思います。もしかしたら、そのような動きをした児童がいたかもしれません。指示は、単純明快にすべきと思います。これからも気をつけていきたいと思います。

・「盛者必衰のイントネーションを正さなくてよいのでしょうか？」は、よい着眼です。最初に読んだ児童は、難しい言葉をふりがなに従って意味を考えることなく音読していました。その時点で、先生が読み方を教える方法もあったと思います。ただ、あの授業の中で、「盛者必衰」という言葉を数回取り上げて意味を把握させていくなかで、少しずつイントネーションが改善されていったことも事実です。最後の指音読では、ほぼ改善されていました。そのあたりは、授業者の考え方かと思います。

なお、不明な点は、お近くだと思いますので、Ｋ．Ｍ先生にお尋ねください。

・「難しい場合は、先生の解釈を教え込んでもよいのかを教えて下さい。」については、先生の解釈を教え込むことはしませんが、先生はこう考えるがどうだろうかという気持ちで、私は授業しています。K.M先生もそうだと思います。教式では、これは間違いだということは否定しますが、読み取り方はいろいろあってよいこともあります。特に年齢や環境で味わい方に変化が起きることは自然なことと考えます。その意味で、テスト対策の授業を目指すのではなく、読むことの楽しさを感じさせる授業をしていると、私は考えます。そのためには、書かれている文字・語句・文法等をしっかり踏まえることを意識しています。ご覧いただいた授業でも、板書された文章の文字・語句に着目させています。詩「よかったなあ」での『あ』の扱いなどは、そのことをよく表しています。

宮城県では、大崎市古川西部コミュニティ・センターで宮城いずみ会の定例会を開いています。毎月第３土曜日の１３時半～１６時まで、授業や授業案を中心に学習会を開いております。参加フリーですのでご参加ください。具体的な内容は、いずみ会のホームページをご覧ください。

「どの子も落ち着く国語指導」http://izumikai100.web.fc2.com/

ご感想やご質問をお寄せいただきありがとうございます。参加された方に感謝の気持ちを込めてお送りします。また、公開授業の会が開かれたときには、是非、友人・知人とお誘い合わせてご参加ください。お待ちいたしております。

関東は、梅雨明けが発表になりました。急に猛暑となり体がついていけません。盛夏に入ります。ご自愛くださり、ご活躍されることをお祈りいたしております。

一言、お礼まで。

令和元年８月吉日

いずみ会 会長

各 位